

第49回城戸賞応募作品

成
熟

佐々木
ひとみ

あらずじ
喫茶店で働く蕪木まゆみは、旦那の正孝か
ら日々暴力を受けている。まゆみと顔なじみ
の高校生・鯉沼弘太郎はその光景を日常的に
覗き見ていた。弘太郎は卓球部員との喧嘩で、
大橋百々子に怪我をさせてしまった。百々子に
つけてしまったた痣を見て、喫茶店での暴力が
想起する。弘太郎の異変に気付いた百々子は、
弘太郎にボールで自らを打つように頼む。暴
力への興味から百々子の指示に従う弘太郎。
百々子の指示は次第にエスカレートしていく。
彼女・野口美保。弘太郎を激しく非難するが、
百々子への嫉妬にかられて、自らも百々子に
手をあげてしまう。それにより我慢できなく
なった弘太郎は、美保と共に百々子に暴力を
振り出す。初めは戸惑っていた美保だったが、
嬉しそうな暴力を受け、百々子を見て次第に
三人での行為にめり込んでいく。
そんな中、百々子の帰りが遅いのを心配し
た父親の聡が、百々子を迎えにくる。百々子
に対して親子以上の親密な態度をとる聡。
百々子は家で聡から性的虐待を受けていた。
聡からの異常な愛情が弘太郎と美保に露呈し
た。途中で、百々子は弘太郎と口をきかなくな
る。途方にくれた弘太郎は美保と百々子を喫
茶店へ誘う。そこで繰り広げられる大人の暴
力を目撃し、翌日から暴力への興味が一段と
増す二人。美保が正孝の真似をして、百々子
の首を絞めだすと、弘太郎は制御がきかなく
なり、そうなる自分が怖くなる。
翌日、弘太郎が喫茶店を訪れると、正孝が
一人。正孝は弘太郎の暴力への欲求を見抜い
ていた。そんな二人の元に、警察がやって来
る。正孝はまゆみを殺害していた。まゆみの
死体が運び出されるのを見てしまった弘太郎。
ついに自分が制御できなくなる。

を 保 太 め 手 歯 ら す
も の 郎 郎 手 止 れ る 向
う 声 警 郎 前 を 止 れ 弘 かつ
誰 も 察 は 前 を 止 れ 弘 かつ
も 百 に 捕 に けて が こと 郎 高
止 々 連 ら 卓 強 かな 々 校
め 子 行 え 球 く な 々 子 百
る の される 顧 力を な 々 子 百
こ 声 弘 問 いた 弘 先 絞 々 子
と も 太 部 部 員 の 聡 手 息 根 首 止
は 弘 郎 員 の 手 息 根 首 止
で う 届 弘 太 郎 には 弘 太 朗
き かな い 弘 太 郎 には 弘 太 朗
ない 弘 太 郎 には 弘 太 朗
。 弘 太 郎 には 弘 太 朗

登場人物表

鯉沼弘太郎（15）高校一年生

野口美保（16）弘太郎の彼女

大橋百々子（ももこ）（16）弘太郎のクラ

スメイト

蕪木まゆみ（27）喫茶店の店員

蕪木正孝（31）喫茶店のオーナー・まゆみ

大橋聡（45）百々子の父親

荒井悠太（15）卓球部員

土屋博紀（16）卓球部員

鯉沼理子（43）弘太郎の母親

鯉沼薫（44）弘太郎の妹

野口幸二（41）美保の母親

松村（40）卓球部の顧問

卓球部員

吹奏楽部員

警察

○ 鯉沼家・表（夜）
住宅街に立つ洋風の一軒家。

○ 同・弘太郎の部屋
電気のついていない真っ暗な部屋。
外を車が通り過ぎる音がする。
窓から部屋に微かに明かりが入る。
勉強机の上に置かれた、折れた卓球ラ
ケットが妖しく照らされる。

○ 同・キッチン

胡瓜を切っている鯉沼理子（43）。
鯉沼薫（14）、入ってきて、冷蔵庫
からチョコレートを取って食べる。

理子「お腹減った」

薫「一個でやめなさいよ」
理子「お腹減った」

薫「そのまま出ていこうとする」

理子「多分ね」
理子「最近遅いのよねえ」

理子「多分ね」
理子「最近遅いのよねえ」
瓜を切りにかかる。

○ 田んぼの一本道（夜）

強く風が吹いている。
人気がない。

○ 喫茶店「梟」・表（夜）

田園風景の中、喫茶店がぽつんと立っ
ている。
木造の古民家風の一軒家。
店の前に大量の薪が積んであり、風が
吹くたびにゴトゴトと音を立てる。
店内は電気がついていて明るい。

○ 同・物置小屋前

店の裏手にある物置小屋。
外灯はなく、店の灯りも届かない暗闇。

その中を人影が小さく動く。

○同・店前

人影が店に走り寄ってくる。

店内の灯りが、屈んだまま近づいてくる。鯉沼弘太郎（15）を照らす。

弘太郎、店の窓の下に駆け寄り、ゆっくりと窓から店内を覗く。

弘太郎の心臓の音。徐々に早くなる。

風が強く吹き、店の前に置かれた薪が音を立って揺れる。

振り返る弘太郎の額を汗が伝っていく。店内から小さく女性の悲鳴が聞こえ、

心臓の音。次第に大きくなり……

「タイトル「成熟」――

○高校・校庭（昼）

蟬の音が響いている。

○同・教室

教師の松村（40）、黒板に化学式を書いている。

窓際の一冊後ろの席に座る弘太郎、ぼんやりと板書している。

松村「じゃあこの問題を……」

振り返る松村、前の方の席で眠っている男子生徒を見、頭を教科書で叩く。

松村「視線をそちらにやる弘太郎。おおい、授業中だぞ」

寝ぼけ眼の男子生徒が身体を起こす。弘太郎の右手に力が入り、握っていた

シヤ―ペン芯の芯が折れる。折れた芯は、隣の席の大橋百々子（16）の机に飛ぶ。

弘太郎「あ、わりい」

百々子

松村 「大きな瞳で弘太郎をじっと見る百々子。じゃあこれ三塚――解いてみて」

○同・校庭（夕）

校庭を走る卓球部員。
弘太郎、先頭を走る。
最後尾にはたらたらとついていく百々子の姿。 ×

走り終えた弘太郎、汗を拭きながら呼吸を整えている。 ×
遅れて土屋博紀（16）、走り終える。

弘太郎 「遅」
博紀 「あー：：つら」
弘太郎 「お前遅くなってるじゃん」
博紀 「弘太郎が早くなってるんの。どしたん？」
弘男性ホルモン増えたん？

弘太郎 「は？」
博紀 「彼女できたから、ホルモン増えて足早くなつたんじゃないか。ねーの。努力の結果だわ」

弘太郎 「さうか。ねえ」
博紀 「そうだよ」
弘太郎 「なー野口とき、もうやったの？」

弘太郎 「はあ？」
博紀 「弘太郎、博紀にプロレス技をかける。走り終わったばっか。無理。やめてやめて。」

弘太郎の背後で舌打ちが聞こえる。
弘太郎、博紀を解放し振り返ると、荒井悠太（15）が立っている。
苛立つて歩いている様子の悠太、弘太郎を強く睨むと歩いて行ってしまふ。

弘太郎 「く睨むと歩いて行ってしまふ。」
博紀 「荒井、ほんとうに悪いよな。部活中もずつ一人だし。友達いねーから、弘太郎のこと妬んでんだろ」

○同・体育館（夕）
ぼんやりと百々子が体育館に入っていく

る。

ステージ前に卓球台が並んでいる。集まる卓球部員達の中で、弘太郎と悠

太が言い争っている。

博紀「おいやめろって弘太郎。そんなやつ相

手にすんなよ」

弘太郎「悠太に詰め寄る弘太郎。

悠太「こいつから先に始めたんだよ」

悠太「そう胸ぐらを掴む弘太郎。」

弘太郎「ああ？」

博紀「やめろって二人を引き離す博紀。

悠太「だっさ」

弘太郎「悠太を強く睨む。

弘太郎「博紀を振り切り悠太に殴りか

かる。

百々子、二人の間に入っていく。

弘太郎「！」

弘太郎のパンチを思い切り頬に受け、

床に倒れる百々子。

ぎよっとする弘太郎。

百々子、声を一切あげず、頬を押さえ

倒れる。

周りの部員たちが集まってきて場が騒

然となる。

弘太郎「！」

弘太郎、倒れている百々子を呆然と見

ている。

○同・職員室前の廊下（翌日・昼）

職員室のドアが開いて弘太郎、出てく

る。

待っていた野口美保（16）、駆け寄

り、

美保「松村怒ってた？」

弘太郎「部活出るなって言われた」

美保「ちゃんと謝ったの？」

弘太郎「松村に？謝ったよ」

弘太郎「開いて閉じて開いて閉じてを繰り返す。
弘太郎、いきなり走り出す。」

○喫茶店「鼻」・店前（夕）
弘太郎、喫茶店の外から中を覗いている。
中に客はおらず、蕪木まゆみ（27）
が一人、厨房で皿を拭いている。
弘太郎、深くため息をつき店のドアノ
ブに手をかける。

○同・店内
店内に音楽はかかっておらず、時計の
秒針の音だけが響いている。
ドアが開き、弘太郎が入ってくる。
まゆみ、皿を拭きながら弘太郎の方を
向く。

まゆみ「また来たの」
弘太郎、店内の席に座る。
弘太郎「どうせお客さんいないからいいじゃ

まゆみ「まゆみ、いな」
まゆみ「で？今日は。何飲むの？」
弘太郎「じゃあエスプレッソで」
まゆみ「かつこつけちゃって」

弘太郎「もう高校生だからね」
まゆみ「じゃあもうそろそろお金とるからね」
弘太郎「そこはいじやん。近所のよしみで」
まゆみ「近所だったのは弘太郎が小さい頃で
しよ」

弘太郎「み、弘太郎がテーブルにつく姿を見てまゆ
み、ねえ弘太郎なんかあった？」

まゆみ「は？なんで？」
まゆみ「ううん、なんとなく」

まゆみ「まゆみ、棚からマキネッタ（直火式エ
スプレッソメーカー）を取り出す。」
まゆみ「弘太郎。やってみる？」

弘太郎「何を？」

弘太郎「マキネッタを持ち上げて見せるまゆみ。」

弘太郎「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ「マキネッタをもち上げ弘太郎

まゆみ、店前の『OPEN』の看板を裏返す。風が強く吹き、髪を抑えながら店に戻って行く。店の扉が閉まる音が鳴り、弘太郎はゆっくり振り返る。店内を伺いながらゆっくりと店に戻り、店の裏手にまわる。すぐ、店の裏手が近づいてくる音がし、唾を飲み込む弘太郎。

○同・店内（夜）

まゆみ、厨房で弘太郎の使用したカップを洗っている。麻袋に入った大量のコーヒー豆を、厨房まで運んでくる蕪木正孝（31）。

まゆみ「沢山買ったよ」

正孝「美味しかったの？」

まゆみ「うん。試飲させてもらったんだけど、酸味が柔らかくてすごい飲みやすくてさ」

正孝「飲んでみる？」

まゆみ「まゆみの顔色が曇る。」

まゆみ「……うん」
棚からドリッパーを取り出し、コーヒーを入れた準備をする正孝。麻袋からコーヒー豆を手に取り、匂いをかぐ。

正孝「いい匂い」

まゆみ、皿洗いをする手に力が入る。正孝、豆の匂いを嗅ぎながらまゆみを眺めている。ふと背後からまゆみに近付き、まゆみの肩を殴る。

まゆみ「うっ」

床に崩れるまゆみ。正孝の拳には、コーヒー豆が握られている。続けて背中を二、三発殴る正孝。

起き上がるとうとするまゆみに正孝、上から豆をぱらぱらと落とす、頭を足で踏ん付ける。まゆみ「うう」床に散らばるコーヒー豆。

○同・店前
弘太郎、屈んで窓から店内の様子を覗いている。窓枠を掴んでいる手に力が入る。

○高校・体育館（夕）

弘太郎、卓球台の前に立ち博紀とペアになつてスマッシュの練習をしている。

松村「鯉沼」
弘太郎「はい」

松村に、ステージ前に呼ばれる弘太郎。松村の隣に百々子が恥ずかしそうに立つている。

松村「おまえ大橋になんか言うことあるだろ」
弘太郎「……」

顔を上げると百々子の右頬にはガ―ゼが貼られている。

弘太郎「（ハツとし）……」
松村「自分のしたことなんだから。けじめつ

けろ、けじめ」
松村「荒井は大橋にもう謝ったぞ」

松村「荒井は大橋にもう謝ったぞ」
松村の声が遠くなつていく。

（フラッシュ）
腕に痣をつけたまゆみが部屋の隅で震えている。

上から降りてくる手、まゆみの髪を掴み振り回す。

弘太郎、無意識に右手を開いて閉じてを繰り返している。

その様子を不思議そうに見ている百々

○同・体育器具室

松村「おい聞いてんのか鯉沼！」
弘太郎「あ……ごめん」
百々子「全然、大丈夫」
松村「いいか？大橋」
百々子「縦にうなずく。
その反応に松村、手を叩いて、
弘太郎と百々子は、空いている台に向
かう。
隣の台では悠太が練習している。
弘太郎、悠太を気にするが悠太は弘太
郎を見ていない。
百々子「じゃあ、私出すね」
百々子、卓球のボールを出し、弘太郎
がスマッシュを決める。
百々子、次々にボールを出していく。
思い切りラケットを振る弘太郎。
次々とスマッシュが決まっていく。
と、ボールの一つが百々子の頬のガ
ーゼにあたる。
一瞬びくつとするがへらつと笑う百々
子。
弘太郎「……」
ガーゼから覗く痣から目が離れなくな
る。
弘太郎のボールは百々子の頬に当たり
続ける。
百々子、へらへらとしながら、
百々子「あの、いたいよ」
弘太郎ははっとし手を止める。
弘太郎「あ……ごめん……」
頬を手で触りながら弘太郎を見つめる
百々子。
悠太、横目でその様子を見ている。

卓球台を片付ける部員達。
 最後に台を持ち込む弘太郎と百々子、
 二人になる。
 弘太郎「……じゃあ、おつかれ」
 百々子「……」
 百々子、近くのボールカートからバレー
 ーボールを一つ取り出し、弘太郎に投
 げらる。
 咄嗟にキャッチする弘太郎。
 弘太郎「何？」
 百々子「（へらへらし）打って」
 弘太郎「え？」
 百々子「打ってみて」
 弘太郎「……」
 弘太郎「ボール」
 百々子「なんで」
 百々子「いいから」
 弘太郎、戸惑いながらバレーボールを
 百々子に向けて打つ。
 百々子、構えない。
 ボールは百々子の腰に当たり、落ちる。
 しやがんでボールを拾う百々子。
 立ち上がり弘太郎をじっと見つめる。
 弘太郎「何？」
 百々子「……」
 弘太郎「何？って」
 百々子「もう一回」
 弘太郎「え？」
 百々子、弘太郎にボールを上げようと
 する。
 弘太郎「おい」
 弘太郎「かまわずボールを上げる百々子。
 弘太郎、思わずアタックを打つ。
 ボールは百々子の顔にぶつかり跳ね返
 る。
 よろける百々子。
 弘太郎「あ……顔を押しさえ」う」

弘太郎「……おい」

百々子、顔をあげ、へらっと笑う。ボールのがぶつかつた衝撃で、ガ―ゼが取れかかつており、頬の痣がよく見えて

弘太郎「おいつて」
器具室の端に飛んだボールを拾い上げ

再び弘太郎へボールを上げる百々子。弘太郎、戸惑いつつボールを打つ。ボ―ルは百々子の肩に当たり落ちる。

百々子「もう一回」
弘太郎の呼吸が早くなる。

弘太郎「……」
百々子の額から汗が流れ、頬の痣の上

弘太郎は百々子の足元に落ちたボールを拾い、百々子に向け思い切りボールを打つ。

○鯉沼家・弘太郎の部屋（夜）

弘太郎、ベッドに寝転び天井を見上げ

る。起き上がり、スクールバッグから卓球のラケットを取り出し、宙に向かって

理子の声「弘太郎――、ご飯とつくにできてるわよ――」
弘太郎、勢いよく振り続ける。段々と息が荒くなる。

○高校・廊下（昼休み後）

廊下の掃除をしている男子生徒達。雑巾掛けをする弘太郎の視線の先に、

美保「弘太郎――」
美保「隣のクラスから出てくる美保。」
弘太郎「よ――」
美保「よ――じゃない。昨日どうしたの？」

弘太郎「え？」
 美保「一緒に帰るか連絡したの？」
 弘太郎「あー：：ごめん：：部活いつもより早く終わってさ」
 美保「連絡返してよ。てか、部活出れたんだ昨日」
 弘太郎「ああ、謝ったから。大橋さんに」
 美保「大橋さんなんだって？」
 弘太郎「え？あ：：うん」
 美保「うん？」
 弘太郎「：：うん」
 美保「うんて、何よ」
 弘太郎「いや、謝ったら：：許してくれたよ」
 美保「弘太郎に疑いの目を向ける。」

○同・体育館（夕）

卓球台の前で基礎練習をしている部員。弘太郎、博紀とペアでカットの練習中。隣の台でラケットを振る百々子の腕に、新しく薄い紫の痣がついているのが見える。

弘太郎「」
 弘太郎「のラケットを振る手に力が入る。強いボールが飛び、博紀はうまく反応できずにボールは変な方向へ飛んでいく。」

弘太郎「ごめん、ミスった」
 ボールは跳ねて百々子の台の下へ転がる。弘太郎、ボールを取ろうと屈む。目の前に百々子の脚。白く綺麗な脚を見て、

弘太郎「：：」
 百々子、弘太郎の視線に気付きへらつと笑う。

練習が終わり、解散する部員。×
 帰る準備をする弘太郎の後方について歩く百々子。×

○同・渡り廊下
弘太郎の後方をついていく百々子。
弘太郎、振り返らず無言でそのまま歩
き続ける。

○同・音楽室
部活終わりの美保。

トランペットをケースへしまうと、ス
マホを取り出しラインを確認する。

美保「もうー」

窓から外を見ると、体育館裏へ歩いて
いく弘太郎と百々子が見える。

美保「……？」

○同・体育館裏

薄暗く人氣が全くない。

遠くから野球部がボールを打つ音が聞

こえてくる。

弘太郎、足を止めて振り返る。

弘太郎「何？」

百々子、気まずそうに笑う。

百々子との距離をつめる弘太郎。

弘太郎「……大橋はなんで俺が荒井殴ろうと
した時、間に入ったの？」

百々子、へらへらし答えない。

弘太郎「……脚」

百々子「脚？」

弘太郎「見せて」

百々子「右足を宙に上げる。」

百々子「……綺麗な脚。」

弘太郎「……綺麗な脚。」

百々子「……いいよ」

弘太郎「……蹴ってみて」

弘太郎「……蹴ってみて」

弘太郎「（……）」

弘太郎「……）」

弘太郎「……）」

横から軽く蹴る。弘太郎、あがったままの百々子の脚を

百々子「……そんなもん？」

弘太郎「……」

百々子「弘太郎をじっと見つめたまま

脚を上げ続ける。

弘太郎「思い切って百々子の脚を蹴り

つける。

弘太郎「バランスを失い、地面に倒れる百々子。

弘太郎「あつ……」

顔を上げる百々子。

まゆみの顔をしている。

弘太郎「全身痣だらけのまゆみ。

弘太郎「」

手に違和感を感じ、掌を開くとコーヒ

豆。

弘太郎「」

百々子「どうしたの？」

弘太郎「倒れた百々子の上に馬乗りに

なる。

顔をあげ百々子、笑う。

百々子「いいよ」

横たわる百々子の周りにコーヒ豆が

散らばっている。

弘太郎「拳を振り上げる。

と、背後から美保がやって来る。

美保「薄暗い中で弘太郎の姿を確認し、

美保「弘太郎？」

弘太郎「振り返り美保を見る。

美保「ねえ、何してるの……？」

美保「近付いてくる。

弘太郎「」

美保「倒れている百々子を確認し、

美保「ねえ、やだ」

美保「百々子に駆け寄り身体を支える。

弘太郎「弘太郎を睨み」

ちよつと何してんの」

弘太郎「あ……」

美保「え！？」

大橋さん、ねえ大丈夫！？」

百々子「」

美保など見えていないように、

美保「弘太郎の方を見る。」

百々子「大橋さん？」

美保「……え？」

百々子「もう一回」

美保「もう一回」

美保「情けない弘太郎の顔。」

美保「困惑し立ち上がる美保。」

美保「え？ちよつと……どういう……」

弘太郎「困惑したまま、その場を走り去る美保。」

弘太郎「ちよ、ちよつと待って美保」

弘太郎「何もない。」

弘太郎「立ち上がり追いかける弘太郎。」

弘太郎「倒れたままその様子を見ている百々子。」

○同・校門
必死で駆けて行く弘太郎。

○帰り道
弘太郎、走っていく美保を全速力で追

い、美保の手を引く。

弘太郎「待ってよ」

美保「ちよつと」

美保「美保、弘太郎の手を振りほどく。」

弘太郎「離して」

弘太郎「待って」

弘太郎「手を払う美保。」

美保「やめてよ」

美保「揉み合う二人。」

美保「その勢いで手を上げようとする弘太郎。」

美保「（驚いて）何？！」

美保「弘太郎、美保の声に手を下げる。」

弘太郎「やめてよ」

弘太郎「なにそれ……」

美保「……ごめん」

弘太郎「……」

美保「……」

弘太郎「……」

美保「……」

弘太郎「……」

美保「……」

美保「ねえ、弘太郎の正面に立つ。」

弘太郎「……」

美保「ねえって、最近おかしいんだよね俺」

弘太郎「……」

美保「おかしいよ」

弘太郎「……」

美保「ねえって、美保、ほんと弘太郎を突き飛ばし走って逃げる。」

動けない弘太郎。

○鯉沼家・弘太郎の部屋（夜）

ベッドに突っ伏す弘太郎。

「顔を上げスマホを確認する。」

「『明日放課後話せる？』」

「美保に送ったラインは既読になっていない。」

薰「ねえ、部屋に入ってくる。」

弘太郎「……」

薰「毎日、迷惑なんですけど」

弘太郎「ねえ、弘太郎！待ち！」

弘太郎「目を丸くする薰。」

薰「反抗期かよ」

○高校・廊下（朝）

美保のクラスの前で立っている弘太郎。教室からクラスメイトと共に、教科書を持った美保が出てくる。

美保「（驚き）あ」
弘太郎「美保、ちよっと話せる？」

美保「……」

弘太郎「美保」

ふいっと弘太郎と反対の方に歩いてい

く美保。

弘太郎「ねえ、美保……」

やるせない表情をして立ち尽くしてい
る弘太郎。

○同・音楽室（夕）

美保、吹奏楽部員達と音合わせをして

いる。

窓の外を眺めながらトランペットを吹

く。

変に力が入り、思った通りの音が出な

い。

集中しようとするがどうしても外が気

になってしまふ。

美保「っ」

トランペットを下げた立ち上がる。

○同・体育館（夕）

体育館を覗く美保。

既に片付けを終え、帰り始めている卓

球部員。

美保、弘太郎と百々子の姿を探すが見

当たらない。

美保、横を通り過ぎようとする悠太に、

美保「荒井君」

悠太「え？」

美保「弘太郎どこ知ってる？」

悠太「嫌な顔をする。」

悠太「知らない」

美保「そうだよね。ごめんねありがとう」

体育館の奥にすたすたと歩いていく美
保を怪訝な顔で見る悠太。

○同・体育館器具室

器具室を覗く美保。

ジャージ姿の百々子が一人床に転がっているのが見える。

美保「あー美保、咄嗟に百々子に駆け寄る。」

百々子「大橋さん」

美保「百々子の体を起こす美保。」

百々子「ねえ：：大丈夫？」

美保「百々子の腕の痣を見る美保。」

百々子「：：全然そう見えないうよ」

美保「弘太郎は？」

百々子「帰った？」

美保「大橋さんは何してるの？ここで」

百々子「待ってる。鯉沼くんのこと」

美保「改めて百々子の身体についた痣を見る。」

美保「頷く百々子。」

美保「百々子、不思議そうに美保を見る。」

美保「：：だめだよ。絶対。こういうのは」

美保「どうして？：：」

百々子「困惑する美保。」

美保「百々子は正面から美保を見つめ、」

百々子「え？」

美保「触らせる百々子。自分の太ももの痣を」

百々子「鯉沼くんにつけられた傷：：羨まし」

美保は咄嗟に百々子の頬を叩く。
パシンと鋭い音が響く。

美保「あ」
動揺する美保。

美保「ごめん：私：：」
百々子、へらっと笑う。

百々子「いいよ」
百々子が再び美保の手をとる。

美保「え」
百々子、楽しそうに美保の手を自分の
頬に当て、

百々子「いいよ。もつと」
美保「（顔を赤くし）やめてよ」

美保「（顔を赤くし）やめてよ」
美保、かっとして百々子を思い切り突
き飛ばす。

百々子が床に倒れるタイミングで、弘
太郎が器具室に入ってくる。

弘太郎「美保？」
美保「（青ざめ）弘太郎：：」

弘太郎「何やって」
弘太郎、百々子を見る。

弘太郎「：：」
美保「違うの。私：：」

美保「呼吸が荒くなる弘太郎。
私、つい：：かっとして：：」

美保「様子がおかしい弘太郎に気づかない美
保。」

美保「これじゃ、弘太郎と一緒にゃん」
弘太郎「え？」

弘太郎「ちよっと手を貸して」
美保「あ：：」

美保「美保、駆け寄り百々子の肩を支える。
美保「うん」

美保「と、弘太郎は百々子の頬を叩く。
美保「え」

美保「え」
更に強いビンタが飛び、衝撃を感じ目

美保「ちよつと」

百々子「すぐに笑顔になる。

弘太郎「今度は百々子の脚を蹴る。

鈍い音がし、バランスを崩した百々子

は背後にあるバスケットボールコート

にぶつかると。

脚が少し切れ、血が流れる。

美保「驚いて百々子に近づく。

美保「：：ねえ」

百々子「大丈夫」

美保「でも跡になっちゃうよ：：」

百々子「上ジャージのフアスナーを下

げ肩を露出させる。

とどこどころ紫色に変色している百々

子の肩。

美保「あつ：：」

美保「これ、全部弘太郎が：：？」

痣をなぞりながら、呼吸が荒くなる美

保。

百々子「そうだよ」

百々子「百々子は美保に足を向ける。

美保「いいよ：：ムカつくでしょ？」

と叩く。美保「顔を赤くし百々子の足をパシリ

百々子「もつと、もつといいよ」

美保「（葛藤）」

再度美保の手に力が入った瞬間、外が

騒がしくなる。

百々子「：：」

百々子「百々子、フアスナーを閉めふらつと立

ち上がり、

百々子「じゃあまた明日」

美保「：：」

取り残される弘太郎と美保。

美保「視線を下に向けると、床に数滴

の血。

学生が近づいてくる気配に、思わず自分のブレザーの袖で血を拭く。

○川沿い（夜）

百々子、一人スキップしながら下校している。

○鯉沼家・弘太郎の部屋（夜）

ベッドの上で、ラケットを振る弘太郎。段々とラケットを振るペースが上がり、枕をラケットで叩き始める弘太郎。息が上がっていく。

理子の声「弘太郎――うるさい音すんのやめなさい――近所迷惑でしょ――」

かまわずラケットを振り続けようとす

る弘太郎。

枕元に置いた携帯が鳴る。

美保からの着信。

躊躇するが結局電話に出る弘太郎。

美保の声「弘太郎？」

弘太郎の声「うん――」

美保の声「……あのさあ……」

弘太郎の声「うん――」

美保の声「……こないだ貸した参考書あるじやん――」

弘太郎の声「え？」

美保の声「参考書――」

弘太郎の声「……あ、あ――」

美保の声「あれ、里美が次貸してほしって――」

弘太郎の声「ああ――」

美保の声「終わってる？」

弘太郎の声「いや、まだだけど……それなら、今日終わらせるわ――」

○野口家・美保の部屋

本棚には、大量の参考書が詰まっている。

勉強机に座り、弘太郎と話している

美保。

美保「ううん……そんなに急ぎじゃないから、――」

来週とかで、いいんだけどさ……

弘太郎「あ、うん」

美保「……それだけ」

弘太郎「……じゃあね」

弘太郎「……待って、美保」

美保「……なに？」

弘太郎「……明日……部活終わったら教室に

居ると思う」

美保「……」

弘太郎「……別に先帰っててもいいし……」

美保「……あ、うん……わかった」

美保「……美保、通話を切る。」

美保「……何か考えているように……」

机の中に隠すようにしまわれている少女漫画雑誌を取り出す。

ページをぱらぱらと捲り、適当に読み進める。

つきあいたての学生の恋愛のいざこざが描かれている。

つまらなそうな表情で更にページを捲り、お悩み相談室コーナーのページで手を止める。

「気になる相手へのアプローチ方法がわかりません」

「受験勉強をとるべきか彼氏をとるべきか」

物足りなそうに、雑誌を閉じてベッドに仰向きに大の字に寝転がる。

美保「……あ、あ」

右に左にごろごろと転がっていると、ハンガーにかけたブレザーが目に入る。

美保「……あ」

○洗面台

美保、洗面台に水を張って、液体洗剤を垂らす。

ブレザーをつけようとするとところに野口幸（41）が顔を出す。

幸「……ちよつとなに汚したのよ」

美保「あ、美術で絵具、裾につけちゃって」

幸「もう。高いんだから気を付けてよ？」

美保「はい」

幸「ねえ。次の試験はどうなの？勉強進んでる？」

美保「……うん。問題ないと思う」

幸「このままの調子でいけば、推薦もらえらん」

美保「……はいい」

幸「出で行く。」

美保「……ブレザーを洗おうと裾を持ち上げるが、手を止める。」

幸「幸がいないことを確認し、ブレザーについた百々子の血の匂いをかぐ。」

美保「……」

幸「恥ずかしくなりすぐに裾をつけ、バシヤバシヤと洗う。」

○ 高校・教室（昼）

授業を受けている弘太郎。ノートの書くフリをしながら、隣の席の百々子の足に視線を落とす。貼られたいくつもの絆創膏から紫色の痣がはみ出している。

○ 同・廊下（夕）

部活終わり、ジャージ姿の弘太郎が早足で歩く。ジャージ姿の百々子がついで歩く。後ろを同じくジャージ姿の百々子がついていく。

○ 同・吹奏楽部室前廊下

吹奏楽部員「あれ美保、パート練してかないの？」

美保「ごめん。今日用事あるんだ」

廊下を早足でかけていく美保。

電気がついていない教室。
外は日が落ちかけており、オレンジ色
に照らされる教室。
その中で弘太郎、椅子に座っている百
々子の腕を卓球のラケットでパシパシ
叩いている。
スマッシュを打つように手を振り、ゆ
っくりと百々子の腕にラケットを当て
る。
パシ、パシと音が教室中に響く。
ドアが開く音。
振り返る百々子。
気まずそうに美保が入ってくる。
百々子、顔を上げ、嬉しそうな顔をす
る。
百々子「野口さん」
美保、顔が赤くなるのを誤魔化すよう
にすたすたと早足で二人の間まで歩き、
百々子の頬を掌で叩く。
嬉しそうに耐える百々子。
弘太郎「美保」
美保「もう一度、百々子の頬を叩く。」
美保「ムカつく」
百々子「キラキラした顔で真っ直ぐに
美保に向く。」
百々子「もつと」
再び叩く美保。
二人の様子をじっと見ていた弘太郎、
我慢できずに反対側から百々子の腕を
ラケットで叩く。
百々子の頬と腕、真っ赤になる。
百々子「ふふ」
弘太郎がラケットを机の上に置き、百
々子を素手で叩こうと腕をあげる。
廊下から生徒の声と、走る音が近付い
てくる。
弘太郎と美保は手を止める。
すぐ近くで声。
男子生徒「ほんとうに教室に忘れたのかよ」
女子生徒「えーそう思うんだけど」

微動だにしない美保と弘太郎をよそに、弘太郎のラケットで自分の腕をパシパシと打って遊んでいる百々子。今日

男子生徒「先輩達待ってんだからさあ。今日別にいじやん？置いてっつても」

女子生徒「えー」廊下の声が遠くなる。

美保「……」

弘太郎「……」

百々子「百々子、笑い出す。」

百々子「びつくりした」

美保「びつくりした」美保。

百々子「百々子の肩を軽く手で叩く美保。」

百々子「びつくりした」

百々子「びつくりした」

百々子「びつくりした」

百々子「びつくりした」

百々子「びつくりした」

百々子「びつくりした」

百々子「びつくりした」

百々子「びつくりした」

百々子「びつくりした」

百々子「びつくりした」

百々子「びつくりした」

○同・校庭実景

化学の実験中。

机の上のアルコールランプが、薬品を

入れたビーカーを熱している。

美保の「大橋さんはさ」

美保の「大橋さんはさ」

美保の「大橋さんはさ」

美保の「大橋さんはさ」

美保の「大橋さんはさ」

美保の「大橋さんはさ」

美保の「大橋さんはさ」

ける。

暗闇の中、ぼおと燃える火に美保、手を近づけてみる。

美保の顔を歪めすぐに手を離す。

美保の声「なんで痛いのが好きなの？」

百々子の声「百々子、笑ってライターに自分も人差し指を近づける。

美保の火に指をさっと通す。

百々子の声「生きてるって感じがする」

美保の百々子と美保、きやつきやと弘太郎の点ける火に手を近づけたり離したりして遊ぶ。

百々子の炎に入っていく百々子の指。

○教室（日替わり）

黒板消しで美保にたたかれている百々子の声「戯れあう二人。

百々子の弘太郎、教師用の長い定規を取り出し

美保の百々子の声「なんか大人みたい」

百々子の声「大人か：：なんか大人みたい」

美保のチヨークの粉が舞う中で、百々子戯れながらうらくなる。

美保の声「うん。いけないこと、してるみたい」

○喫茶店「梟」・店内

カウソンの奥で震えているまゆみ。

正孝、コンロの火を止めてドリッポポットを持ち上げる。

まゆみの上でドリッポポットを斜めに傾ける正孝。

○同・店前

看板が『CLOSE』になっている。微妙かに聞こえるまゆみの悲鳴。

○教室（夕）

美保、濡らした雑巾で百々子の痣を冷

美保「弘太郎は？」

弘太郎「え？」

美保「弘太郎はなんで？」

弘太郎「なんで？」

美保「戸惑う弘太郎。」

美保「なんでもキラキラした眼で弘太郎を見

る。百々子もキラキラした眼で弘太郎を見

る。額に冷や汗が浮かぶ。

弘太郎「なんでだろ。」

美保と百々子と視線が合わせられない。

百々子「楽しいならなんでもいいよ。」

美保「：：まあいっか。」

美保と百々子、笑い出す。

つられて愛想笑う弘太郎。

○校門（夕）

楽しそうに帰っている美保と百々子。

美保「後ろをついて歩く弘太郎。元気がない。

しちやって私。」

校門の外に立っている大橋聡（45）

の姿を確認し、急に立ち止まる百々子。

襟のよれたTシャツと短パン姿に、整

えられたくない髪。

だらしない格好をする聡を見、不審

そう顔で前を通り過ぎようとす美

保。

聡「百々子。」

百々子「：：。」

下を向き足を止める百々子。

聡「遅いから心配してきちゃったよ。」

美保「（百々子を見）：：。」

百々子「部活って言うてるよね。」

聡「部活って言うてるよね。」

聡「そうだよ。びくびくし出す。」

聡「そうだよ。びくびくし出す。」

聡「百々子を抱きしめる。」

弘太郎「（ギョッと）……」

聡「本当に本当に心配だったんだよ。百々子が居なくなっちゃった時のことを考えたらいてもたつてもいられなくて……」

聡「百々子の腰をさすりながら泣きそ

うな声をあげる。

百々子は戸惑う弘太郎と美保を置いて、

聡の手を引き、歩きだす。

百々子に連れて行かれる聡。

弘太郎「（困惑し）……」

美保「お、大橋さんまた明日」

百々子、無視して歩いていく。

○帰り道

聡と百々子、手を繋いで歩いている。

無表情の百々子。

聡「百々子。さっきのおともだち？」

百々子「……」

聡「後ろにいた男の子もおともだち？」

百々子「……」

聡「（繋いだ手を見て）最近百々子はよく怪

我をするね。部活で？」

百々子「……」

聡「それもおともだちが関係してるの？」

百々子「どうでもいいでしょ」

百々子の強い口調に、百々子の手を強く握る聡。

百々子、なんの反応もしない。

○教室（翌日・朝）

百々子、席に伏せている。

弘太郎「おはよ」

百々子「……」

弘太郎「今日どうする？」

百々子「……」

弘太郎「美保、部活今日ないらしいんだよね」

百々子「……」

百々子「……」

百々子「……」

百々子「……」

百々子「……」

百々子「……」

百々子「……」

百々子「……」

百々子「……」

百々子「……」

無視され続け、途方に暮れる弘太郎。

× 授業中、弘太郎は百々子の様子を気に

× するがずっと伏せたまま。

弘太郎「……」

× ホームルームが終了すると、百々子は

× すぐに立ち上がり部活に向かおうとする。

弘太郎「なあ、大橋」

無視して教室を出る百々子。

○同・廊下

弘太郎「追って教室から出てくる弘太郎。」

弘太郎「大橋って」

弘太郎「小走りで逃げる百々子。」

弘太郎「ちよっと待ってよ」

弘太郎「追って行く。」

○同・階段

弘太郎「一向に止まる気配がない百々子。」

弘太郎「（大声で）今日部活さぼってコーヒ

ー飲み行かない？」

立ち止まるきよとん顔の百々子。

○喫茶店「鼻」・店前（夕）

店前に一台車が止まっている。

○同・店内

客席に座る弘太郎の隣に美保、向かい

に百々子。他に一組客がいる。

店内には他に一人の元にまゆみが飲み

物を運んでくる。三人の元にまゆみが飲み

美保と弘太郎の前にアイスコーヒ、

百々子の前にオレンジュース。

まゆみ「珍しいね。弘太郎が友達連れてく

るの。しかも可愛い女の子2人も」

○同・店内

客席に座る弘太郎の隣に美保、向かい

に百々子。他に一組客がいる。

店内には他に一人の元にまゆみが飲み

物を運んでくる。三人の元にまゆみが飲み

美保と弘太郎の前にアイスコーヒ、

百々子の前にオレンジュース。

まゆみ「珍しいね。弘太郎が友達連れてく

るの。しかも可愛い女の子2人も」

○同・店内

客席に座る弘太郎の隣に美保、向かい

に百々子。他に一組客がいる。

店内には他に一人の元にまゆみが飲み

物を運んでくる。三人の元にまゆみが飲み

美保と弘太郎の前にアイスコーヒ、

百々子の前にオレンジュース。

弘太郎「照れる美保。
 弘太郎「うるせえよ。てか珍しいじゃん、他
 にお客さんいんの。」
 まゆみ「残念でした。いつも暇なわけじゃあ
 りませーん」
 笑いながら厨房に戻っていくまゆみ。
 弘太郎「まゆみの首元の包帯を気にす
 る。」
 美保「知り合い？」
 弘太郎「あーうん。小さい頃、近所に住んで
 て」
 美保「へえー：：」
 百々子「：：」
 美保「三人は無言で飲み物を飲む。
 美保「おいしい」
 店の外に一台、新たに車が停まる。
 外を気にする弘太郎。
 美保「お、大橋さんってさ、どうして卓球部、
 入ったの？」
 百々子「：：」
 美保「ほら私吹奏楽部だけど、たまに三階の
 窓から見えるんだよね。大橋さんが嫌そう
 に走ってる姿。運動、好きじゃないのかな
 っ」
 百々子「：：」
 正孝「弘太郎、買い物袋を持って入ってくる。
 弘太郎「あ、いらっしやい」
 正孝「あ、いらっしやい」
 弘太郎「こんちは」
 美保「百々子、ストローでジュースを吸いな
 がら、
 百々子「：：」
 百々子「：：」
 美保「え？」
 百々子「卓球」
 美保「それだけ？」
 百々子「ほんとはやりたくない」
 美保「：：」
 百々子「部活。ほんとはやりたくないけど、

美保「家にいたくないから」

弘太郎「：：」
「なあ、昨日のつてお父さん？」

弘太郎「美保、机の下で弘太郎を蹴る。」

美保「（慌て）凄く仲良さそうだったよね。」

弘太郎「私人家なんかお父さんと超仲悪いから羨ま

しいなつて：：」
弘太郎「：：」
百々子「：：」

黙る三人。
美保、ひたすら飲み物を飲む。

他の客が店を出て行く。
弘太郎、鞆から財布を取り出す。

弘太郎「そろそろ出よう」
美保「ええ？もう？」

美保「立ち上がる弘太郎。
「ちよつと待ってよ」

弘太郎「アイスコーヒを急いで飲む美保。
「（まゆみに）お会計」

まゆみ「え、もう行くの？もつと居ればいい
のに」

弘太郎「またくるよ」
まゆみ「レジのトレーに二千円出す。」

弘太郎「別に今日もいいわよ」
まゆみ「今日はいい」

まゆみ「かっこつけちゃって」
「お金を受け取るまゆみ。」

美保「（まゆみに）ごちそうさまです」
まゆみ「はい」

まゆみ「手をはらひらと振る。
店を出ていく三人。」

カウntaxの正孝、出て行く百々子の
絆創膏を見ている。

○同・店前（夜）

美保「もうそんな急いでどこ行くのよ」
「すたすたと歩いて行く弘太郎に、つい

立ち止まり二人を振り返る弘太郎。
目がギラついていて

○同・店内

正孝「店の閉店作業をしている正孝とまゆみ。

まゆみ「弘太郎君何しに？」

正孝「彼女自慢でもしにきたんじゃない？」

まゆみ「どつちが彼女？」

正孝「もう一人は？」

まゆみ「隣に座ってた子じゃない？」

正孝「もう一人は？」

まゆみ「んー彼女のお友達かな」

正孝「んー」

正孝「ブルを拭いており気付かないまゆみ。

まゆみ「いくつだっけ」

正孝「もうそんなか」

まゆみ「もうそんなよ」

正孝「若い時の俺に似てると思うんだよな、

弘太郎君」

まゆみ「へ笑って」えー？全然似てないよ？」

まゆみ「のに気がつき、カウンターに行くのを

やめる。」

まゆみ「私、ゴミ捨て行ってこようかな」

正孝「いいよ、明日朝俺が行くから」

まゆみ「んー」

正孝「正孝、まゆみの前へ、コーヒーを運ぶ。

にこにこ笑っている。」

正孝「当ててみて」

まゆみ「え？」

正孝「どこの国のか」

躊躇するまゆみを、席につかせる正孝。

まゆみのコーヒーカップを持つ手が震

える。」

正孝「どこでしょう？」

まゆみ「んー」

正孝「わからない？」

まゆみ「んー」

まゆみ「んー」

まゆみ「んー」

まゆみ「んー」

まゆみ「んー」

まゆみ「んー」

正孝「だめだね、勉強してって言ってるじゃん」

正孝「まま一口飲む。」

正孝「うん、うまい」

正孝「下を向いて震えるまゆみ。」

正孝「立って」

従うまゆみ。
思い切りまゆみの腰を蹴る。

次いで背中から荒々しく突き飛ばされ、まゆみは客席につんのめる。髪を引っ張られテーブルに頭を押さえつけられるまゆみ。正孝はそのまま、まゆみの首を締める。

○同・店前（夜）

店内を隠れて覗いている弘太郎、美保、百々子。

美保「え……大丈夫なのかな……」

百々子「……すごいね……」

美保「恍惚とした表情の百々子と美保。を、見ている弘太郎。」

○高校・教室（翌日・夕）

弘太郎、百々子の首に手をかけている。ぐつと力を入れ、数秒後手を緩める。

咳き込む百々子。

弘太郎、隣にいる美保を見、

美保「うん……」

美保「うん、なんか、違う……（百々子に）

百々子「……」

美保「私……」

美保「……」

酷く咳き込む百々子。
弘太郎の心臓がドクンと脈打つ。

弘太郎「――」
百々子と美保を見る眼光が鋭くなる弘太郎。

美保「（百々子に）どう？」

百々子「うん」

美保「こんなかな」
百々子「わかんないけど……生きてるって感

じする」
美保、笑う。

美保「だって生きてるもん」
美保「つられて微笑む百々子。」

美保「弘太郎またやる？」
下を向く弘太郎。

百々子「……心臓がドクンドクンと激しく打つ。」

弘太郎「顔を上げる弘太郎。」

美保「どうした？」

弘太郎「え、なんか、気分が……」

美保「え、大丈夫？」
弘太郎「俺帰るわ。続きはまた」

美保「え、大丈夫？」
弘太郎「俺帰るわ。続きはまた」
うに教室を出て行く。

美保「あまりの早さにぼかんとする百々子と

美保「大丈夫かな？」
百々子、首を傾げる。

美保「帰ろっか」

○帰り道
全速力で走っていく弘太郎。

（フラッシュ）
首を締められている百々子。

（フラッシュ）
首を締められている美保。

（フラッシュ）
首を締められている美保。

（フラッシュ）
首を締められている美保。

弘太郎「やばいやばいやばいやばい」
× 首を締められて、いるまゆみ。
×

○ 鯉沼家・居間（夜）

薫と理子と父親の鯉沼雄二（46）が
食卓を囲んでいる。音が聞こえる。
雄二「おい、弘太郎は？」
理子「駄目。なんか最近悩んでるみたいで全
然部屋から出てこないの」

○ 同・弘太郎の部屋

弘太郎、布団に全身くるまって震えて
いる。

○ 大橋家・外観（夜）

二階建ての古びたアパート。

○ 同・居間

居間の隅に仏壇があり、百々子の母親
の遺影が飾られている。ソファに座る聡の、膝の上に座って
いる百々子。二人ともお風呂上がりでパジャマ姿。
聡「（ぶつぶつと）ごめんね、ごめんね」
ドライヤイヤーを切り、百々子の頭を撫で
る聡。

聡「百々子、また痣が増えるよ」
百々子「仕方なさそうにわかってよ」
聡「（仕方なさそうに）わかってよ」

の間の男の子もそうだよ。お父さん。こ
心配させようとしてるんだ。お父さん。ご
めねか。まああげられなく。お母さんだ。つ
と側面にあげられなく。お母さんだ。つ

あんなことにはならなかつたもんね。百々
子にはもうお父さんしかいないし、お父さ
んにも百々子しかいないんだから……

百々子の首筋にキスをする聡。
その手は百々子の胸に伸びる。

○高校・体育館（夕）

松村、前に立ち、卓球部員に指示して

松村「弘太郎は今日体調崩してて休み。なの
で今日はイレギュラーなペアで行くぞー」

松村「あとお前らの中で備品の卓球ラケット
が足りなくて……」

百々子と悠太、ペアになって打ち合っ
て百々子と悠太、ペアになって打ち合っ

悠太「あいつサボりか」

悠太「鯉沼」

悠太「知らない」
悠太「知らない」

悠太「え？」
悠太「え？」

悠太「嫌いだよ」

悠太「どうして？」

悠太「あいつすぐ暴力振るうじゃん」

悠太「入学してすぐぐらいいに……あいつにふざけ
て蹴り入れられたんだよ。それがすげー痛
くて。そういうの嫌な奴もいるってこと、

悠太「なんだよ」

悠太「痛みを感じるだけいいじゃん」

悠太「なんだよ」

悠太「は？」
百々子「そう、うの本人に直接言ったらい

の。百々子、強いスマッシュを出す。
咄嗟に返した悠太のボールは、百々子
の身体に当たり百々子の前でバウンド
する。

悠太「悠太、百々子の痣に気付く。

百々子「お前、それ何。その痣」

悠太「：：最近あいつと一緒にいるとこよく

見るけど：：なに？やられてんの」

百々子「うるさい」

悠太「やられてんなら先生に言った方がいい

よ」

百々子「うるさいって」

悠太「いや、まじでそういうの泣き寝入りす

んの絶対よくないって」

百々子「うるさいうるさいうるさいうるさい

うるさい！」

ヒステリックに怒鳴る百々子の声に、

唾然とする悠太。

周りの部員も練習の手を止める。

○弘太郎の部屋（夕）

ベッドから起きない弘太郎。

理子「弘太郎、大丈夫なの？」

弘太郎「：：仮病」

理子「あんたねえ」

全身布団に包まっている弘太郎の表情

理子「ま、いいけど。どうせいるならまゆみ

さんとここに林檎届けてに行っちゃってない？

お隣さんから沢山いたらいちやう

ちや食べきれないからさあ」

動かない弘太郎。

理子「諦めて出て行く。

布団から顔を出す弘太郎。

どこからともなくマキネッタを火にか

けた時の音がしてくる。
耳を押さえ、再び布団に強く包まる。

○高校・教室（夕）

席に座り、一人宿題をしている百々子。

美保、扉を開け教室に入ってくる。

百々子一人だけなのを確認し、

美保「弘太郎は？」

百々子「今日休みだった」

美保「具合、悪いのかな。大橋さん部活は？」

早くない？」

百々子「：：サボった」

美保「じゃあ一緒だ。私もサボり」

百々子の隣の机にスクールバッグを置き、座る。

美保「弘太郎休みてことは：：私のこと待

っててくれたの？」

百々子「：：」

黙って宿題を続ける百々子をじっと見る美保。

元気のなさそうな百々子。

美保「大橋さんてさ」

百々子「：：」

美保「友達いないでしょ」

百々子「（へらつと笑い）：：直球だね」

美保、笑う。

百々子「野口さんは多そう」

美保「：：ううん、私も似たようなもんかも

よ。ちゃんとした友達、ほんとの。何でも

言えるの。いないもん」

百々子、じっと見る。

立ち上がり、美保の手を自分の頬に置

く。

百々子「いいよ」

美保は、百々子の頬を叩く。

他に誰もいない教室にぱしんと鋭い音

が響く。

ふふつと笑う百々子。

百々子「響いた」

百々子の顔をじっと見る美保。

美保「大橋さんて、化粧しないの？」
 百々子「したくない」
 美保「してみていい？」
 百々子「え」
 美保「美保、スクールバックから化粧ポーチ
 を取り出す。」
 美保「パーツが整ってるから、化粧映えする
 と思うんだけど」
 百々子「（困って）ええ」
 美保「化粧ポーチから剃刀を取り出す。」
 美保「じゃあ、まず眉毛剃るのは？」
 百々子「：：：：：いいよ」
 美保「美保、剃刀を開き百々子の眉を整えは
 じめめる。」
 百々子「初めて：：：」
 美保「そうなの？あ、目閉じててくれる？当
 たっちゃいそうでちよつと怖い」
 美保「百々子の眉毛、剃られていく。」
 美保「痛くない？」
 百々子「：：：大丈夫」
 美保「目を閉じて美保に身を任せる百々子。」
 美保「うん」
 百々子「お母さんいなくて」
 美保「：：：うん」
 百々子「三年前に事故で死んで。それからお
 父さん壊れちゃって：：：」
 美保「うん」
 百々子「ずっと働きにも行けなくて引きこも
 って：：：普通の生活じゃないの。ご飯も毎
 日私がコンビニで買って帰って：：：毎日、
 美保「うん」
 百々子「：：：それとね。私のことたまにお母
 さんだと思わないかな：：：お母さんだと思っ
 て：：：それでね：：：それで：：：」
 百々子「手を止める美保。」
 百々子「百々子の閉じた目尻に涙がうっすら浮
 かぶ。」

美保「うん」
百々子「：：私ずっと死にたいって思ってる」
保。百々子を見て苦しそうな表情になる美
美保「：：うん」
百々子「でも」
目を開く百々子。
美保「？」
百々子「鯉沼くんと野口さんと一緒にいる時
はたのしい」
美保「：：」
百々子「痛みを感じると、生きてるって感じ
する」
美保「」
美保、百々子を抱きしめる。
百々子「！」
美保「：：こういうのは？」
百々子「？」
美保「こういうのは、生きてるって感じしな
い？」
百々子「：：ちよつとする」
美保「でしょ」
百々子「けど叩かれてる方がいい」
美保「そっかあ」
笑い合う二人。
美保「あ、ちよつと待って」
軽く剃刀で眉毛を剃る。
美保「あ、いい感じかも」
百々子「ほんと？」
美保が手を下げた瞬間、百々子の頬が
剃刀ですつと切れる。
血がじわんと滲む。
美保「あ」
百々子「え？」
気付いていない百々子。
美保「血」
頬の血を左拳でなぞる美保。
美保「綺麗」
美保、そのまま手に持った剃刀で百々

百々子「子の腕をつつとなぞる。」

百々子「いた」美保を見る。

見つめ合う二人。

○喫茶店「鼻」・店前（夕）

看板は「C L O S E」になっている。

弘太郎は外から中を覗くが、店内は暗

く誰もいないように見える。

帰ろうとするが、中で物音が聞こえる。

弘太郎は引き返し、店の入口のドアノ

ブを回す。

鍵がかかっている。

○同・店内

中に入ると、客席に座り頭をかかえて

下を向いている正孝。

弘太郎の姿にびくつとして顔を上げる。

弘太郎「え、あ：：ども」

正孝「あ：：君ね：：来たの」

弘太郎「今日、まゆみさんは？」

まゆみの名前にびくつと肩が震える正

孝。

正孝「今日はねえ、いないよ」

弘太郎「急に酷く咳き込む正孝。」

弘太郎「大丈夫ですか。なんか、顔色悪いです

よ」

正孝「あ、そうなの。だから、今日は閉店、

弘太郎「めんね」

弘太郎「そうですか：：これ母さんから林檎。

お裾分けらしいです」

正孝「弘太郎、正孝に林檎の袋を渡す。

弘太郎「あ、ありがとう」

弘太郎は、正孝に背を向け出て行こう

とする。

正孝「あ、待って、待って」

弘太郎振り返る。

正孝「やっぱ一杯コーヒー飲んでいきなよ、

弘太郎「いいんすか」

正孝、厨房に入り、マキネッタを火にかける。手が小さく震えている。弘太郎、入口近くの席につく。弘太郎「やりました」正孝「へびくつとして」え？弘太郎「それに教えてもらって」こないだまゆみ正孝「ああ、これ：：コツ覚えたら簡単でしょう」正孝「高校、一年だっけ」弘太郎「そうっす」正孝「そうか。若いね」弘太郎「そうか。若いね」正孝「そうか。若いね」正孝「（手を差して）やったの、誰か」弘太郎「殴る素ぶりをする正孝。」弘太郎「：：これは」弘太郎「弘太郎、右手を左手で隠す。」弘太郎「違うだろ」正孝「嘘つかないでいいよ。わかる」弘太郎「いや：：」正孝「多分だけどまゆみも気付いてたと思うよ」弘太郎「はっとして正孝を見る弘太郎。」弘太郎「似てるよ。君、俺に」正孝「マキネッタがぼこぼこ言い出す。」弘太郎「俺に、隠さなくていい」弘太郎「：：：正孝さんはなんでなんすか」正孝「：：：ああいうの。ああいう、殴ったり：：：マキネッタからコーヒーが溢れ、コン」

正孝「口の火がボオっと強くなる音がする。
 正孝「ああ、やりすぎた」
 正孝は厨房に火を止めに行く。
 注ぐ。棚からカップを取り出し、コーヒーを
 正孝「：覚えてないんだよね」
 弘太郎「え」
 正孝「日常化しちゃって細かいこと、覚えて
 ない」
 弘太郎「コーヒーを弘太郎に出す。
 正孝「：覚えてない？」
 弘太郎「：まゆみが仕事辞めたの知ってる？
 数年前に。經理の仕事」
 弘太郎「ああ、はい。知ってます」
 正孝「上司からパワハラ受けて病んで、仕事
 辞めて。ここ手伝わせて。でも、一向によ
 くない。貯金のこと。自分はお金のことを気に
 するの。はあ」
 弘太郎「最初のきっかけが何だったのかは思い
 出せないけど、多分、そんなまゆみにイラ
 イラして手がでた。で、一回手が出たらも
 うそっからは、それが日常。なんかミスし
 たら殴るし、ぐちぐち言ったら殴る。今日
 は暑いねってあいつが言っただけで、コー
 ヒーぶっかけてたこともある」
 弘太郎「：」
 正孝「最近もうコーヒーの匂い嗅ぐと殴り
 たくなるの。もう日課だよ」
 正孝「近くでパトカーの音がし出す。
 目を感じてるんだろう：だからエスカレ
 ートした」
 弘太郎「：」
 正孝「なんかすげー怖い顔してるよ」
 弘太郎「む。震える手でコーヒーを一口飲
 む。
 弘太郎「：似てないですよ、俺」
 正孝「（笑って）似てるよ」
 パトカーの音が近付き、店前で停まる。

弘太郎「気付く弘太郎。」

弘太郎「何すか」

弘太郎「黙る正孝。」

弘太郎「あれ何すか」

黙って下を向く正孝。

警察が店内に入ってくる。

×店のバックヤードから青いブルーシートに包まれた物体が警察に運ばれてくる。

正孝、厨房の前で警察に話を聞かれて

いる。入り口付近で立ちすくんでいる弘太郎、

すれ違いざまに、ブルーシートからは

み出した痣だらけのまゆみの腕を見る。

ドクドクと激しい心臓の音。

止まらない。警察、弘太郎にも話を聞こうと近づいてくる。

弘太郎「店の外に駆け出す弘太郎。」

警察「ちよつと君！」

○鯉沼家・弘太郎の部屋（夕）

薫「お兄ちゃん確かブルーレイプレーヤー持

りましてよ」と。ライブラリーD V D 見たいから借

薫「なんだこれ」

○道（夕）

弘太郎、全速力で走る。

心臓がドクンドクンと打ち続ける。

後ろから追ってくる警察との距離が開

いていく。腕を思い切り振ってひたす

拳を握り、腕を思い切り振ってひたす

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

弘太郎「あああああああああ」

○鯉沼家・弘太郎の部屋

薫と理子、クロゼットの中を覗いて
いる。大量の卓球ラケットが山積みになら
れている。ラケットは全て、強く打ち付けられた
ように割れたり、欠けたりしている。
弘太郎の机やベッドの淵には、ラケッ
トが打ち付けられた跡が沢山残っている

○高校・校門前（夜）

弘太郎、走ってくる。
校門前に、中の様子を伺っている聡が
いる。弘太郎、全速力で走ってきて聡にぶつ
かる。よろける聡。

聡「ちよつと：：気をつけなさい！」

聡「君、百々子の顔を見る。」

顔を上上げる弘太郎、聡のことを見てい
ない。校舎の方からこちらへ歩いてくる百々
子と美保を見ている。美保、弘太郎に気がつき、駆け寄って
くる。

美保「弘太郎！」

後を追ってくる百々子。
ばつちり化粧をされている。
腕には複数の剃刀で切った跡が残って

いる。傷跡に気がついた弘太郎、呼吸が更に
乱れていく。百々子、様子のおかしい弘太郎をじつ
と見ている。弘太郎、体調悪いんじ

美保「びつくりした。」

弘太郎「いや？」

聡「百々子に近づく。」

聡 「百々子、どうしたの。その顔」

百々子 「：：」

美保 「あ、お父さん。ごめんなさい。これは

私が勝手に：：」

聡、美保の言葉を聞かず、百々子を抱

きしめる。

聡 「お母さんにそっくりだね」

聡 「お父さんの為にしてくれたの？」

表情が死んでいく百々子。

聡 「百々子！？」

百々子 「百々子、弘太郎の前に立つ。

弘太郎 「：：」

百々子 「鯉沼くん、続き」

弘太郎の手を掴み、自分の首元に持つ

ていく百々子。

百々子 「やって」

弘太郎 「：：でも：：」

百々子 「やって」

弘太郎 「：：いや：：俺：：」

百々子 「やって」

弘太郎 「：：」

百々子の腕の痛々しい傷を間近で見る

弘太郎 「：：」

弘太郎 「：：」

百々子の首に置かれた手に力をかける。

慌てる聡。

聡 「おい！百々子に何してるんだ」

苦しそうな百々子の顔。

弘太郎 「：：」

小刻みに震える弘太郎の身体。

×

(フラッシュ)

首を締められている百々子。

×

(フラッシュ)

首を締められている美保。

×

(フラッシュ)
首を締められているまゆみ。

× (フラッシュ) ×
運ばれて行くまゆみの姿。

× ×
弘太郎「ああああああ」

弘太郎「ああああああ」

聡「おい！」
聡、弘太郎の手を離させようと間に入る。

弘太郎「我を忘れたように聡の顔に殴

りかかる。倒れる聡。

聡「おい：：やめろ：：」

美保と百々子、黙ってその様子を見て

悠太「鯉沼？」
美保、声の方に振り返ると部活終わり

悠太「お前何やってんだよ」

悠太「また暴力かよ！やめろよ」

百々子「止めないで」

悠太「は？なんで？ってか、野口さんもなん

で黙って見てんの？止めなよ。彼女だろ？」

悠太「お前からおかしいんじゃないの？」

悠太「どけって」

悠太「百々子をどかし、弘太郎の元に

無我夢中で聡を殴っている弘太郎。

悠太「お前……」

悠太「手が震え出す悠太。」

悠太「……おい」

意を決して弘太郎の腕を掴んで止めにかかる。

弘太郎、聡を殴る手を止めて悠太の方を見る。

弘太郎「……」

弘太郎、悠太のことを見ているようで、

悠太「鯉沼やめろよ……」

続く悠太の言葉を待たずに弘太郎、悠太の顎を狙い本気で殴る。

悠太「うっ」

落ちかける悠太、堪える。

顔を上げ、思わず拳に力を入れる。弘太郎に向かって、拳を振り上げるが直前のところで思い直す。

悠太「くっそ」

悠太、校舎の方に走り出す。

弘太郎「……」

弘太郎、地面に倒れたまま動かない聡に向き直る。

そこにぼろぼろになって倒れているまゆみが見える。

まゆみの周りにはコーヒー豆が散らばっている。

弘太郎、ゆっくり近づく。

踏まれていくコーヒー豆、小さく音をたてて潰れる。

弘太郎、まゆみの上に馬乗りになり、まゆみの顔を殴る。

まゆみ、気絶しており目を開かない。そこを何発も何発も殴る弘太郎。

目を大きく開いてその光景を見ている百々子。

百々子「……」

ぼろぼろのまゆみの姿、百々子に変わる。

百々子「鯉沼くん……」

弘太郎、下を向いて、嫌な笑みを浮か

百々子「……」

パトカーに乗せられる弘太郎。

パトカー、サイレンを鳴らして発車す

る。大きな瞳で去っていくパトカーを見つ

める百々子。顔が赤色灯で定期的に赤く光る。

百々子、パトカーを見送りながら、へ

らつといつものように笑う。

(終)